

神奈川大学生涯学習・エクステンション講座

神奈川大学ヤオ族文化研究所主催講座

アジアに生きる少数民族の 文化を知る

第6回 儀礼と儀礼文献

浅野春二（國學院大學）

2015年2月28日 KU ポートスクエア

ヤオ族の宗教的儀礼における「陰兵」について

浅野春二

はじめに

ヤオ族文化研究所では、中国湖南省永州市藍山県匯源郷のヤオ族（過山瑤／ユーミエン）の調査を行っている。その調査の資料に基づいて、宗教的儀礼について述べてみたい。

ヤオ族の宗教的儀礼は、道教の神々の信仰や儀礼を受容して形成されたヤオ族独特のものである。儀礼には漢字で表記された大量の儀礼文献が使用されている。そうした儀礼文献を駆使して行われる儀礼は大変複雑で、大規模なもの（「度戒」）は2週間以上に及ぶものもある。儀礼を担当する「師父」（祭司）は、自分の持っている「陰兵」（陰間の兵隊）を使役して儀礼を行っていく。「陰兵」は、儀礼において重要な役割を果たしている。そこで、「師父」と「陰兵」との関係から、ヤオ族の宗教的文化の一端を見ていきたいと思う。

1、ヤオ族の祭司（師父）

ヤオ族の祭司制度について、吉野晃氏は、タイでの調査に基づいて次のように述べている¹。

儀礼知識は、一部の専門家に独占されて伝承されているのではない。程度の差こそあれ、儀礼知識がヤオ族男子の間に広く知れ渡っているのである。その中で儀礼知識を蓄積した者が、依頼を受けて祭司の役目を果たすのである。したがって、一つの村の中に何人もの祭司（設鬼人・倣師人）がいることになる。これらの「祭司」は、ふだんは農耕に従事しており、依頼に応じて祭司の役目を果たす。

タイのヤオ族の祭司制度の特徴は、形式的にすべての男子が祭司資格を得なくてはならない点である。ヤオ族には、霊的なランクを決める一連の儀礼がある。それは掛燈（クワータン）・度戒（トウサイ）・加職（ギヤツエ）・加太（ギヤツタイ）という順序になっており、後の儀礼ほど規模が大きくなる²。高段階の儀礼を経るにつ

¹ 吉野晃「ヤオ族の道教と風水」『「道教」の大事典』新人物往来社、1994年。

² 吉野晃氏は、タイと中国湖南省藍山県の儀礼の変差に関して述べる中で、「加職」の位置づけについて次のように述べている。「加職」は、タイでは生きている受礼者が通過する儀礼であり、受礼社自身の儀礼ランクが上がる。しかし、藍山県では、加職は「補充」と並んで祖先のランクを上げるための儀礼であり、度戒の時に併行される。この場合、生きている受礼者が行うのはあくまでも度戒だけである。祖先の儀礼ランクを上げる儀礼は、タイにおいてもあるが、加職とは別の儀礼で「加太」jaa-thai という。加太では、祖先の儀礼ランクが加職よりも上に上がり、儀礼名は「太+個人字+番号+郎」という、

れて、靈的なランクが高くなり、守護靈の数も増える。第一段階の「掛燈」は、一種の成人式でもあり、おおよそ十二歳ころに行なうのが原則だが、それ以前に受札する例もあるし、経済的な理由などで三十歳以上になって受札する例もある。いずれにしてもヤオ族男子たるもの一度は通過しなくてはならない儀礼である。

興味深いのは、この儀式が、形式上、道士の叙任式に似た形式をもち、父親などの父系親族を師匠として師弟の関係を確立し、祭司資格を認証する象徴的表現を示していることである³。ただ、台湾などの漢族の専門家道士の叙任と異なる点は、この儀礼が父系親族の男子が集団で受札することであり、また、原則としてヤオ族のすべての男子が受札することである。この点で、ヤオ族の祭司制度を「総体的祭司制」

(collective priesthood) と呼ぶ研究者もいる。この掛燈儀礼で認定される祭司資格は、形式的なものであり、実際に祭司の役目を果たすためには儀礼知識が必要である。儀礼知識の修得に熱心な者もいれば、そうでない者もいるため、特定の人に祭司の役割が集中するわけである。」(391～392頁)

吉野氏がタイの調査に基づいて指摘していることは、基本的には湖南省藍山県のヤオ族の祭司にも共通して見出せる。

2、全住民が「道教」に入信する制度

ヤオ族の祭司制度は、後漢の天師道教団が、全住民が道教に入信する制度を持っていたのと類似したところがある。初期天師道が形成した道教的共同体については、丸山宏氏が次のように述べている⁴。

後漢の時代に登場した初期の天師道教団は、祭酒と称される司祭を筆頭に、治という教区組織に全戸が参加し、道教の神々の目録である籙を男女の子供から大人まですべての人が授与され、人生儀礼や年中行事も道教独自の方法で行われていた。こうした中で、全住民的基盤からすぐれた者が位階を上に登って祭酒になってゆく。道教以外の神の崇拝や別系統の宗教技法は、祖先崇拝や一部の既存の行事信仰を除いて、許容されない状況が想定される。儀礼は教区の集会所である治、もしくは信者の自宅に附設される靖で行われるのが基本であった。主要な儀礼文書は基本的には上章儀礼で

郎名の姓の部分「太」に替えたものが命名される(例：太龍一郎)。逆に姓の名乗りはなくなる。このように、同じ「加職」という名称の儀礼を伝承しながら、一方は生者のための儀礼、もう一方は祖先のための儀礼と、位置づけが大きく異なっているのである。」吉野晃「ユーミエンの儀礼の研究における課題：儀礼の意味と伝承、不易と変差」『瑶族文化研究所 通説』第二号、2010年、18頁。

³ 吉野晃氏は、タイと藍山県の儀礼組織の変差について次のように述べている。「儀礼の組織について言えば、タイでは同姓の父系親族が集団で度戒を受ける「師男」となるのに対して、藍山県では、同じ村の異なった姓の人たちが度戒を受ける「会首」となっていた。タイの度戒では、父系親族で度戒を受けるため、かなり年少の子供でも同じ父系親族として儀礼に参加していた。すなわち、タイでは親族組織が儀礼を主催するのに対し、藍山県では地縁組織が儀礼を主催している。」吉野前掲 2010年、18頁。

⁴ 丸山宏『道教儀礼文書の歴史的研究』汲古書院、2004年。

用いられる章に限定されると考えてよい。こうした道教的共同体は六朝に入って古来のままですべてを維持することはできず、破綻し長続きしなかったようである。なお、全住民参加型の道教共同体の事例として注目されるのは、宋代に天心法の体系を受容した中国南部の少数民族のヤオ族が、共同体ごと全住民が道教に入信する制度を持ち、現在に至っている事例である。(576頁)

3、「道教」に入信し「祭司」の資格を得る儀礼

中国湖南省藍山県のヤオ族では、還家願儀礼中の「掛灯」(掛三灯)と「度戒」が行われている。

(1)、還家願儀礼の「掛三灯」

張勁松氏が、『藍山県瑶族传统文化田野調査』で述べているところを参照したい。まず、還家願儀礼については、次のように述べている⁵。

家願は、藍山県「過山系瑶族」に古くから代々伝承されている独特な家の儀礼である。その始まりとも言える「還家願」中の伝灯儀礼及び度戒儀礼は道教を源流とし、瑶族社会に入ってから瑶族の文化と結合し双方の信仰文化を混交している。決まりによると一代ごとに必ず掛灯儀礼を一回とさらに一回の家願を行わなければならない。もし三代続けて掛灯と還願を行わなければ、祖先の盤王はその子孫として認めなくなる。また分家する場合は、掛灯儀礼を通して認可されなければならない。香炉を分け家々の香火を受け継ぐのである。

還家願儀礼はいつ行うか、厳密な日取りの規定はなく、ただ一代に少なくとも一回は行わなければならないと定められている。瑶族の人々はこれによって先祖を受け継ぐ任務をまっとうし、災厄から逃れ、福を得ることができると考えている。

(137頁「一、儀式の基本資料」)

掛灯は掛家灯と掛衆灯の二種類に分けられ、掛家灯では灯明を三個かかげ、掛衆灯は灯明を十二個かかげる。掛家灯の機能は二つある。一つ目は、掛灯者は受礼者すなわち施主本人が自分の家の香炉を受け継ぎ、先祖を祀ることを受け継ぐことで先祖の守護を得ることである。二つ目は、宗教職能者にさせるということである。掛家灯を行うと法名がつけられ、六十名の家先壇に属する陰兵の守護を得る。また、自分を守る法術だけでなく、他人を助けるための法術を得ることも可能となる。

⁵ 張勁松・趙群・馮榮軍『藍山県瑶族传统文化田野調査』岳麓書社、2002年。この「第三章 還家願」の日本語訳は、譚静・大木都志男・財津直美・岡田浩司(訳)、内藤久義(校閲)「張勁松著『藍山県瑶族传统文化田野調査』「第三章 還家願」として神奈川大学歴史民俗学報告第14集『中国湖南省藍山県ヤオ族儀礼文献に関する報告Ⅱ』神奈川大学大学院歴史民俗学資料科学研究科、2012年3月、137～167ページに収録されている。ここではこの訳から引用する。

(141頁「6、掛家灯」)

師男ごとに米の入った木箱がひとつずつ置かれ、三尺六寸の白布で受礼者と米箱を繋ぎ、「搭橋」と呼ばれる。白布の上には、三十六枚の銅錢を置く。掛灯師は化変の呪文を唱える。化変を通して米は千兵万馬に変化するとされる。三十六枚の銅錢は三十六隊の勇兵と変化する。白布は兵馬が通行する金の橋に変化する。米を兵に化す呪文は「此米不是非凡之米、化為天星養人之米、吾師将来化千兵万馬、抛運上壇前、抛把師男、速變速化、吾奉太上老君急急如律令（この米は非凡な米ではないが、天星が人を養う米と化す。わが師はやって来てこの米を幾千万の兵馬と化す。投げ運んで壇前に上らせる、師男に投げ与える。すみやかに変化せよ、我太上老君を奉じる。律令の如く急いで行え）」である。呪文を唱えるときに掛灯師は占いを行い、化変が成功したかどうかを確認する。逆さまにした銅鈴に「六磔米」（すなわち六銅鈴米）を盛り、白布にこぼし、六十兵馬の意とする。白布の下に竹の竿を置き、白馬になぞらえる。のちに白布で米を包んで家先壇の上に置き、「分兵呪」を唱える。師男に六十兵馬を分け、兵馬を家先壇に入れたことを意味する。 (143頁「(7)分兵」)

(2)、度戒儀礼の「掛十二灯」

次に、『藍山県瑤族伝統文化田野調査』によって、「度戒」儀礼について見ていきたい⁶。張勁松氏によれば、匯源郷ヤオ族の「度戒」儀礼には、およそ3つの機能があったという。

①「成年儀礼に似た機能」

以前は当地の習俗的規制に基づき、どの代も青年たちは必ず全員が度戒をしなければならず、ある一家で3代にわたって度戒をしなければ、先祖たちが子孫を認めることもなく、また子孫を加護することもなく、一族断絶の危機におちいる可能性もあった。度戒を受けた青年は、一族の中で正式な成人男子として認められ、結婚して独立することができ、社会活動に参加する権利を他人からも認められたのである。度戒をしていない男は、結婚し、子供を育てることはできたが、還暦の年になっても、一族の成人として数えられることはなかった。 (30頁)

②「生前に陰護を受け、死後仙官となる」

生前に陰護を受け、死後仙官となることを度戒の信徒は皆認識している。度戒によって太上老君の印と三清に管理される最高級の陰兵を得ることができ、太上老君印と陰兵を得てはじめて、ただの人ではなくなる。陰兵は鬼を追い払うことができる。山

⁶ 張勁松・趙群・馮榮軍前掲 2002年。「第四章・度戒」の日本語訳は、丸山宏（訳指導）、佐川潤子・広川英一郎・三村宜敬・李利（訳・校正）「張勁松著『藍山県瑤族伝統文化田野調査』「第四章 度戒」として『瑤族文化研究所 通説』第1号、2009年3月、29～80ページに収録されている。ここではこの訳から引用する。

上には鬼が多いため、度戒後、昼に出かけ、晩には山に入り、鬼に出くわしても、すぐに兵馬で打ち払える。兵馬によって僻邪をし、家人の平安が保て、五穀は豊かで、六畜は盛んに増える。度戒者は、自分の死後天にのぼり官人となれるとも信じており、度戒した際すでに太上老君の認可した封職を得ているので、生きているうちに死後天官になれる一切の手続きが終わっていることになる。 (31

頁)

③「師となる儀礼」

地元の宗教者は度戒が必須でありそれを経て、はじめて最高の等級になれ、独自に大きな法事のできる宗教者となる。 それでなければ何年宗教者をして、どんなに歳をとっても、正式な宗教者として認められない。例えば、ある宗教者は財力が足りなく、度戒儀礼が行えなかったため、彼が大きな法事をするならば、必ず度戒した人をここに招請し、行ってもらうことで天の門があげられる。 (31

頁)

「度戒」儀礼のプログラムの説明（「三、度戒儀礼の過程及び構成」）の中から、「陰兵」に関わる記述をいくつか挙げる。

会首は当日の午後に入壇する。その時度戒儀礼の中心となる主醮師・引度師・書表師・紙縁師は、必ず時間通りに入壇して度戒儀礼の前段階の準備をすべて終えていなければならぬ。彼らはすべて度戒儀礼を受けた“三戒の弟子”であり、来る時にはそれぞれが神軸・本壇兵馬・宗教文献・法器・神杖・神頭・羅帯と道服、及び荷物を持って相次いで壇に着く。醮壇に着くと、規縁師が会首たちを代表して銅鑼をたたいて迎える。タバコを吸ってお茶を飲んだ後、規縁師が“衆位家先堂”の前に香案を設け、おのおの落兵落将、安壇落馬を行い、まず神を衆堂に安座してもらい、その後神に訴える。例えば主醮師は、自らが主催する度戒儀礼の中で、受け持つ法事任務をひと通り申し述べ、神に保護を求める。その他役割を持った人も、各自責任を負う法事の役割についてははっきりと引き継ぐ。兵を降ろした後、書表師・紙縁師は各自部屋に戻って仕事を始める。 (44頁「3.落

兵」)

主醮師は“封立小位齋門”を行った後、規縁師は香案を撤去して、客間のなかに長い机を置き、三つの香案を設けて撥兵し、それぞれの香案に線香を焚き、1杯の酒、1杯の水を並べ、他に三つの盆を用いて、それぞれの盆に1斗2升13の米、1丈2尺14の白布、赤い紙のおひねり、三元六角の銭を入れて香案の上に置く。主醮師、引度師、書表師は各々一つの香案の前に壇を開いて撥兵する。今回の撥兵は、主醮師が三清兵馬、三清兵将を遣し、引度師が刀梯橋梁兵を遣し、書表師が疏表兵を遣して、それらの兵により醮壇と受礼者の安全をはかる。 (46頁「5.一次撥

兵」)

撥兵儀礼は前回と同じであり、証盟師、保拳師が出席して儀礼を司る。証盟師は加職兵をわけ、保拳師は補充兵をわけ。兵をわけるといことは受礼者の先祖のために加職兵を遣わし、父の世代のために補充兵を遣わせるのである。

(47頁「7.二次撥兵」)

十二盞灯は“大羅明灯”と称され、掛灯儀礼の内では最高位のものである。主醮師によって主宰され、《伝度完灯進星延生保安清醮道場一供》が設けられ、《伝度完灯星辰大疏》がひと通り奏せられる。

「祭文」

儀礼のかたちは掛三盞儀礼と同じで、掛灯者は“老君櫓”に座して、彼の前に立てた灯台には12皿の油の灯明が置かれる。15人の受礼者の都合、180皿の灯が同時の燃える様は星のまたたきのようにあり、明るい光を放つ。

(57頁「22.掛十二盞灯」)

証盟師、保拳師は、先ず“文台”の上で天門を開き、それから“白布の天橋”を架け、兵隊を招集する旗を用い、五方五位五騎營兵を招く。いわゆる“東方九夷兵、九九八十一万兵、南方南蛮兵、八八六十四万兵、西方西戎兵、六六三十六万兵、北方北狄兵、五五二十五万兵、中央中黄兵、三九二十七万兵”を招く。招集にあたって《大旗頭》、《大先鋒歌》を唄う。将兵に賞を与える歌である《賞師歌》を唄う。最後に安兵させる。

安兵は、先ず醮壇の前に捕捉(狩猟)、焼山(焼き山)、墾荒(開墾)、播種(種をまく)、収穫(刈り取る)等の瑶族の生業様式を模した舞踊を行う。それから“禁刀(刀を禁じる)”は足の甲に剣を置いて衆位家先堂に蹴り入れる。“場兵帰壇、場兵帰位(兵を壇に戻し、位に戻る)”という。

分兵は、先ず線香、お茶、お酒を用いて陰兵を供え祀る。その後で、新度師男は醮壇の中央に座り、主壇師、引度師が経文を唱え、神に訴えた後に、米をまいて新度師男にそえる。いわゆる“撒米為兵(米をまくのが兵である)”という。

新度師男は開いた前掛けを用いて米を受け取って、再び米を包んで家へ持ち帰って、先祖の神龕の上に置く。総壇師は各位の師男に1枚の“五旗營兵”という兵旗を授ける。

(63頁「39.招兵・分兵」)

兵」)

受礼者は“拝師拝散”の後、醮壇を離れて帰途に就く。親族が呼んできた鼓樂師が醮壇の外で迎え、親しい友達を伴い、クツワを並べてまさに“一路笙肅一路情”で迎えて家に帰る。道袍を身につけ、「回家火牌」を持った受礼者は親しい友や九親六眷が一斉に凱旋を祝う。三戒師が“三朝門外”で開天門を行い、受礼者を迎える科儀が行われ、その後に家の先祖の位牌の前に立ち、“賜兵帰壇”、“賜兵帰位”を行う。これは度戒儀礼中に与えられた兵馬を家の神位に配置する意味がある。1回で“師

刀”が蹴り入れられたら縁起がよいとされる。その後に五穀の兵隊を招く儀礼を行う。これは度戒儀礼の後に人々が繁栄し、五穀豊穡である事を祈る意味がある。

(66～67頁「53.帯兵帰壇」)

4、還家願儀礼の調査および補足調査の資料から

ヤオ族文化研究所では、2011年11月16日から21日(旧暦10月21日から26日)に、中国湖南省永州市藍山県所城郷幼江村の盤榮富氏宅で行われた「還家願」儀礼の現地調査を実施した。その後、2013年8月2日から9日、および、2015年1月4日から6日に、藍山県から儀礼の実施に関わった3名を招いて、神奈川大学において補足調査を行った。

(1)、2011年11月の還家願儀礼

○写真1(11月16日) 2011年11月の還家願儀礼で「招兵師」を務めた趙金付師。神画の掛軸等をオートバイの荷台に載せて儀礼の行われる場所に向う途中。師父(祭司)の「陰兵」は、神画の掛軸とともに移動する。師父が自宅を出る前には、自宅の神龕(祖先を祀った棚)の前で「陰兵」の点呼を行っている(「点兵」)。

○写真2(11月16日) 「落兵落将」。師父が儀礼を行う家に到着すると、自分の連れてきた「陰兵」たちを、それぞれ儀礼を行う家の神龕の前で安座する。

○写真3(11月16日) 祭壇に掛けられた神画。

○写真4(11月17日) 「掛家灯」の内の「分兵」。白布の上の米が受礼者の受ける「陰兵」を表す。

○写真5(11月17日) 「掛家灯」の内の「吹米」。師父が、笏の先に載せた米を受礼者の口の中に吹き入れる。

○写真6(11月18日) 「招兵願」の内の「招五穀魂」。師父が、棹秤に掛けた五穀の束(「五穀粮」)の重さを量っている。五穀魂がやってくると、五穀の束は重くなる。

○写真7(11月21日)「拆兵(たくへい)」。師父が自分のつれてきた「陰兵」をつれて帰るための準備をしている。

○写真8(11月21日) 師父が、神画の掛軸等をオートバイの荷台にくくりつけて帰り支度をしているところ。

(2)、2013年8月の補足調査から

○五穀魂を集めに行く陰兵⁷

a、差兵架橋

五穀兵を招き返す方法については、次のように説明している。

「差兵する。自分（趙金付氏）の兵を遣わして橋を架けてつかまえてくる。」

「差兵架橋。兵を遣わして橋を架ける。」

「専用の橋を架けて、五谷兵が落ちている所まで橋を架けて、五谷兵がやってくる道を作る。」

「彼らが見えないから、ポエで確かめている。道ができたかどうか確かめている。」

「(ポエを投げて) 陽卦 (2枚とも上が平ら) が出たら、出来たということを示している。」

橋を架けて陰兵に五穀兵を集めに行かせる時に唱える詞は、次の通りである。

「差兵差将

架橋架路

差我 60 份兵頭 60 兵将

架起収魄 (魂) 橋樑

収禾橋路陽告 (卦) 架起

陰告占 (貼) 架占 (貼) 路」

ポエは、まず陽卦を出した後、次には陰卦を出さなければならないが、そのわけについては、次のように説明している。

「陽は『架起来』。橋ができあがって五谷の魂が通っていくという意味。陰は『等一用』。出来た後に、後でもう一回使うという意味。」

「後で兵が通っていく。もう一回この路を使う。この路は二回使う。五谷兵が通った後、探しに行った陰兵が通って帰ってくる。」

「ポエをもう一度投げて陰を出さないと、路がなくなる。」

陰兵たちをまず差し向けて五穀兵のいる場所まで橋を架ける。まず五穀兵がその橋を渡ってくる。その後に、五穀兵を捕まえに行った陰兵が橋を通って帰ってくる。だから、もう一度使うために、ポエを投げて陰卦を出す。陰卦を出さなければその路がなくなって、陰兵たちが帰ってこられなくなってしまう。

b、師父の陰兵と施主の家の陰兵

五穀兵を集めて連れてくる陰兵については、次のように答えている。

「(探しに行く兵は)『我的兵』と『他們的兵』である。」

「我的兵 (私の兵)」というのは、趙金付氏の陰兵 (師父の陰兵) であり、「他們的兵

⁷ 以下は、拙稿「招五穀兵について—中国湖南省瑤族 (過山瑤) の還家願儀礼から—」『瑤族文化研究所 通訊』第5号、2015年3月発行予定から引用する。

(彼らの兵)」というのは、施主の家の兵である。それには、その家の祖先の陰兵も含まれる。

「家先単で、一人一人を呼ぶ。彼らも陰兵を持っている。それが集めて連れてくる。その陰兵が五穀魂を連れてくる。祖先も兵を持っている。」

五穀魂を探して連れてくる陰兵については、次のような説明も受けた。

「陰兵は、役割によってそのときそのときに名前がつく。」

「師父が持っている陰兵が五穀兵を連れてくる。」

『他們的兵』は、師父の兵と一緒に集めに行く。もどると神龕に入る。師父の持っている兵は神龕に入らない。」

「陰兵たちは家に帰って、剣を蹴ることで家に入る。これで探しに行った陰兵が戻ってくる。五穀兵を呼び寄せに行った兵が家に帰ってくるのである。」

五穀兵を探して連れ帰ってくる際に働く陰兵は、「師父の兵」と「施主の家の兵」であるが、「施主の家の兵」には施主の家の「祖先の兵」も含まれる。祖先を「家先単」で一人一人呼んで、彼らの持っている陰兵も動員するのである。

「鬮兵回壇」(C-28)に際して、祭司(師父)は祖先壇(神龕)に剣を蹴り入れて「探しに行った陰兵」を祖先壇に戻すが、「師父の持っている兵は神龕に入らない」のであるから、ここで祖先壇(神龕)に入るのは、それぞれその家の陰兵(祖先の陰兵も含む)ということになる。

(3)、2015年1月の補足調査から

○五穀魂と家先兵

「招兵願」では、家から離れてしまった「五穀魂」だけではなく、「家先兵」も呼び集める。「家先兵」はその家の祖先の持っている兵隊である。「家先兵」も、「五穀魂」と同じく時間の経過とともに少しずつ離れてどこかに行ってしまうと考えられている。(「五穀魂」は「五穀兵」とも称するが、「招兵願」の中では、「魂」として扱われる面が強いように思われる。)

○元宵と五穀兵

「開天門」をして降りてきてもらった天の兵は、儀礼が正しく行われるかどうかを見届ける。師父の兵や家の兵(「家先兵」も含む)は、「五穀魂」をあちこち探して早く帰るように促すが、「五穀魂」を運ぶのは「元宵(魑)」の役目である。「五穀魂」は自分で移動せず、「元宵」に運ばれることによって帰ってくると考えられている。

○兵旗と家先兵

「家先兵」は「兵旗」によって集められる。切り紙によって作られる旗の上部は「三清兵」を表し、下部は「天狗」を現している。



1



2



3



4



5



6



7



8